

# 群くき来



舟船の出漁



## 春告げる鯨の豊漁 留萌物語

ニシンが留萌から姿を消して、もう40年以上にもなる。千石場所として賑わいを見せた昔を懐かしく思う人々も、めっきり少なくなってしまう。当時の面影を残すニシン御殿も今は寂れ、ニシンを追うことなく眠っている。

しかし、待ち続けた漁師たちと群来再来を夢みる人々の思いが叶い。

ふたたびニシンは帰ってきた。

**群くき来**

雌が海草などに卵を産み付け、雄が放精するため、群がり、海が白く濁る状態をいう。



モッコ

北海道におけるニシン漁は明らかではないが、文安4年(1447年)に陸奥の国の馬之助という人が、松前の白府村に来て漁をしたとあり、これがニシン漁の始まりであろうと考えられる。

近世に入ると、道内地方の集落は松前藩に統一された。松前地の人口も増え、北前船による東北・北陸地方の交通が確立するにした



ニシン漁のため網をしかける

■日本海―西海岸―を代表する魚のニシンを「西の海の魚」と呼ぶのだ。「ニシノウオ」と略されて、これが「ニシンウオ」と縮まり、「ウオ」を省いて「ニシン」ができた。

■無数に抱卵しているから「妊娠魚」

■恩恵二親に等しい。

■「群集する魚」というアイヌ語

がって、身欠きニシンや数の子は松前藩の大きな収入源となり、大変な繁忙ぶりであったとされている。しかし、松前地のニシン漁は安永・天明の頃(1772年~1788年)から衰退し、それ以降は「追鯨」と称して漁場は西海岸を北上することになる。

ニシンという呼称の由来についてもまた随分たくさん説がある。

で「ヌーシー」のなまり。■両断して身欠きと胴の「ニ身」に分ける。

北海道のニシン漁は明治27年から36年頃が最盛期であったが、漁場の中心が松前から次第に西海岸に移り、江差、歌棄、忍路と中心が北上し、やがて増毛、留萌あたりへと移った。

ニシン漁獲量は明治30年を頂点

# 鯨の魚 HEADING

1998・3



アイヌの船出

として戦前はゆるやかに、戦後は急速に減少し、後志沿岸では昭和30年にその姿を見かけぬようになった。

史上最高の漁獲高を記録したのが明治30年のことで、130万石(97万5千トン)といわれている。およそ30億から40億匹に相当するという。

「蝦夷地江差の5月は江戸にも

ない賑わい」と伝えられたこともあり、この数字からしてさきも想像することは難しい。

花に先立ってのニシンの群来は、春を待つ北海道の人々にとって、まさに「春告魚」と呼ぶに相応しい対象であった。



港に次々と運ばれるニシン

豊漁に次ぐ豊漁で浜にはニシンがあふれ、馬車の後にはニシンが何匹も落ちていたため、子供たちはニシンは買うものではなく、拾うものと教えられていた。また、その量の多さに魚好きの猫もすっかり飽きてしまい、「猫またぎ」という言葉もあった。

千石場所の再来とはいかないまでも、今年留萌で水揚げされたニ

シンは60トン。一匹一キログラムとして換算すると6万匹となる。史上最高の漁獲高に比べると十分の一に過ぎないが、待ち続けたニシンの豊漁に浜は活気づいた。今ではニシン用の網を持つ漁師はめっきり減ってしまったが、ニシンを待ち続けた漁師たちと、ニシンを育てる人々の思いが春とともにニシンを呼んだ。